

心の輪を広げる体験作文 一般部門 優秀賞

『「とまとの家」の、思い出』

ますだ としあき

増田 寿昭

僕は、「心の病」の、精神障害者です。今年で五十七才になります。

二十四才の時に発病して、かれこれ今年で三十三年になります。

病気になって今にいたるまで、いろいろな方々に知り合い、お世話になってきました。また、いろいろな方々と友だちになってきました。そのかわり、今まで五回も精神病院に入院しました。

私が発病してから今までの間、一番心に残る人が一人いらっしやいます。その方のお名前は、塚本とし子さんという方です。塚本さんは、長年精神障害者のボランティアをされてきた方です。二十一年ぐらいボランティアを続けてこられて、ボランティアを辞めてから、塚本さんなりに「なにか私に、精神障害者の人のためにできることはないか」とお考えになり、それで、塚本さんの御自宅を私たち精神障害者のために「フリースペース」として毎週木曜日に開放してくださいました。その名称が、「とまとの家」です。

原則として、「とまとの家」は毎週一日、木曜日の午前十時から午後四時までで、その間なら何時に来て何時に帰ってもいいことになっております。

塚本さんは七十才を過ぎてもお元気な、ベテランの主婦ですので、「とまとの家」では、冷たい麦茶やら、コーヒーや、お菓子などをふるまってくださり、僕たちのためにお昼御飯まで食べさせていただきました。

塚本さんは長年ボランティアをされていらっしやいましたので、塚本さんのことを慕って沢山の人たちが「とまとの家」にこられました。いつも塚本さんは微笑みながら、「とまとの家」にこられた人たち一人一人に「お体の具合はどう」とか、「お仕事の方は順調なの」など、やさしく言葉をかけてくださいました。「とまとの家」は、いつも賑やかでした。僕も、塚本さんに病気の悩み、仕事の悩み、恋の悩みや人生の悩みなど、いろいろな悩みごとを相談しました。「とまとの家」に来る人たちはみんななにかが原因で「心の病」になった人たちですので、みんなそれぞれちがう悩みごとを塚本さんに相談しておりました。相談される塚本さんは、いつも微笑みながら、一人一人をやさしくつつみこむように親身になってアドバイスしてくださいました。ときには僕たちのために「心を鬼にして」きびしく叱ってくださいました。塚本さんには心から感謝しております。

「とまとの家」のおかげで、たくさんの方たちができました。「とまとの家」のおかげで、たくさんの方たちができました。「とまとの家」に来る人たちはみんな、「心の病」の人たちですので、さっきまで冗談を言って笑っていたと思ったら突然大声で泣きだす人もいました。なにかささいなことが原因で、大声で怒鳴りあってケンカをする人たちもいました。「とまとの家」を続けていくために、塚本さんは大変に御苦労されたことと思います。なかなか、普通の人では塚本さんのようなことはできません。塚本さんへの感謝の気持ちは、いっぱいありすぎてうまく言葉にできません。

そんな「とまとの家」も、今年の六月で十周年になるのですが、残念ながら、新型コロナウイルスのために終わりになりました。「とまとの家」がなくなるのはとてもさみしいですが、仕方ありません。

塚本さん、本当に、ありがとうございます。「とまとの家」の友だちは、僕の心の宝物です。「とまとの家」の思い出も、僕の心の宝物です。

本当に、ありがとうございます。